

令和7年度福島県入札制度等監視委員会の意見聴取について

聴取団体：福島県建設専門工事業団体連合会

第1 入札・契約制度に関する課題

1 入札・契約制度全般について

県の入札・契約制度全般について、日頃感じていることや課題と捉えていることについて伺います。

私たちちは直接入札する立場というわけではありません。それ故、現状の入札や契約制度全般に対して直接的に影響を受けることは少なく課題としての優先順位も高くはありません。かと言って、入札・契約制度自体が私たちに全く無関係であると思っているわけでもありません。

ここで言う入札制度が公共という立場で行われる物と限定して言うならば、私たちは入札を行う人、入札を受ける人に、もっと毅然と公共の益となる為に行っているという誇りと自信を持って取り組んで欲しいと考えます。万人に等しい正義が無いように、あるべき先見性と判断力を持って事に当たってもそれを否定されることは少なからずあることでしょう。それでも未来を見据えた上で、入札に携わる方々は、自らの行為に自信を持って胸を張って事に当たって頂きたいと考えています。

第2 建設業界を取り巻く社会情勢や課題について

1 働き方改革の取り組み状況等について

週休二日や長時間労働の是正の実現に向け、どのように取り組んでいるのか伺います。

週休二日や長時間労働の是正については鋭意努力しており、有給や代休の取得も含めて労働者そのものに対しても浸透しつつあると感じています。

一方で、適正な値上げに失敗した建設業界にあっては、より下位層の企業ほど必要利潤の確保に苦労している現状にあり、業としての崩壊が進んでいるように感じられます。労働時間の短縮を図るのであれば労働日数はそれに比して増加し、単位日数あたりで消化できる仕事数も減る一方で労働単価は上昇させなくてはならないのに、管理側の人間ばかりが確保され、現場を支えている専門工事業者の労働環境は表には見えない部分で確実に悪化の一途をたどっています。

兵卒のいない指揮官ばかりの部隊では戦いようがありません。安いお金で雇った寄せ集めの傭兵部隊ではまともな戦いは期待できません。まして、兵站が滞った戦線では戦うこと自体に無理があります。

絵に描いた餅ではなく、具体的で現実性と実効性のある手立てを急いで構築する必要性があります。

2 技術者・技能者の高齢化や労働者不足について

技術者・技能者の高齢化や労働者不足が見込まれる中、熟練技術者、若手技術者、女性技術者の人材確保、定着にどのように取り組んでいるか伺います。(福利厚生の現状、賃金上昇への対応、待遇改善に向けたCCUSの活用、女性技術者の採用等)。

『休みを多く与え、労働時間を短くし、給料を上げれば採用はできます!』

この様な、現状の下請けにおいて出来たら苦労しないような事を平然と説くのが企業コンサルと言われて講演しているのを見るに、いかにも末期症状であることを感じます。

すべての企業が最新の技術と最新の対応をもって事に当たれるなら良いのかもしれません、古い体質をひきずってここまでできた建設業界にとって、IT業界のようにきらびやかな労働環境をそろえることは非常に困難です。また、長年に渡り仕方がないという言葉の下、具体的な対応も準備も実施もしてこなかった建設業界においては当然の理屈を実行する力は殆どない上に、変化までの時間を乗り切る体力も枯渇しているという状況にあるという事を正しく理解・把握した上で対策を講じる必要があるのではないかと考えます。

現実とかみ合っていない数字上だけの理論値なんていう集計は、どんどん現実離れしていくばかりで意欲も気力もすり減らすばかりになっているので、いい加減やめてほしいと感じます。

3 元請け・下請け契約の課題について

元請け・下請けの契約について、現状と課題について伺います。(法定福利費の計上、適正価格での契約、適正工期の確保、適切な変更契約等)

下請けが下請けである以上、元下関係が良好な状況にない限り元下関係の問題は無くなりません。長い時間をかけビジネスパートナーとしての信頼関係を築いてさえ、その関係性が盤石でない現代において、拝金主義という資本主義経済に毒されたビジネスの関係性は絶えず崩壊の危機に晒されていると感じています。

適法に物事を進めた者が損をして、違法に物事を進めた者が得をする。これを徹底できない限りやったもん勝ちの無法社会は適法に社会生活を営んできた良心的な市民をむししばみ続けます。

下請けに潤沢な仕事量がない以上、下請けが選ぶことのできる仕事については質の低下を避けることは困難です。そして、請け負けである以上、下請けからこの質の向上を進めるのは非常に困難であると言わざるを得ません。今までも様々な施策が講じられ状況を改善するために協力して頂きましたが、毎回一歩及ばずの結果を繰り返しながら、穏やかで確実に下り坂を下ってきたと言えるでしょう。

様々な工種、様々な環境、様々な状況によって対応すべき案件は多岐に渡っています。それ故、その多種多様な案件に等しく対応できないとの理由で具体的な直接的な対策はなかなか講じられませんでした。AIが誕生し、与えられた条件下での最適を求められるようになってさえ、この状況は変わっていません。

行政の対応サービスにすらAIが用いられるというのに、膨大に持ち合わせている過去のデータの結論すら出せないでいるうちは、これから課題を根本的に解決するのは難しいかもしれません。

4 建設DX・新技術の活用について

生産性向上、作業の効率化等への対応として建設DXや新技術の活用が進められておりますが、取組等について伺います。(3次元データの活用、情報通信技術の活用等)

情報は持っていること自体に意味はありません。情報は活用されてこそ意味をなします。

一部では当然に情報の活用が始まっていますが、全体的に見れば『情報という形にする』『情報という形で集約する』ことに注力しすぎて作業量ばかりが増えている実情があります。

実際、工事管理という名目で大量な資料を要請されますが、現実的にその資料が精査されることはなかったり、管理すべき立場で資料の不備を全く指摘する事が出来なかったりという事案が散見されています。更には、管理側が受領しておきながら後になって資料の不備を一方的に指摘してきたり、責任を追及してくる事もないわけではありません。

規模が大きかったり無理が利く組織体であれば、新しい技術をコストを支払って導入することも可能ではありますが、導入とコストのパフォーマンスが見合わなかったり、そもそも導入に割くコストを捻出できない組織体が数多く存在する事を忘れないで頂きたいと思います。

『便利』に到達する事が出来ないコストは、最終的にはデットウェイトにしかなりません。性急な理想の追及は、多くの現実を置き去りにし、圧迫し、押しつぶしているということを今一度再確認する必要があるのではないかと考えます。